

# 新・瘠我慢の説

経済学者  
渡辺利夫

## 第十五回 アンシャンレージュムとは何か——朝鮮をみよ

福澤諭吉の頭に棲みついて片時たりとも離れなかったのは、日本の「不羈独立」である。三度の欧米視察により福澤は次第に確固たる世界観を築いていった。西力東漸の帝国主義の時代にあつて日本が亡国を免れるには文明開化以外に道なし、とする信念である。そして次第に関心は朝鮮へと向けられていった。福澤が主宰する『時事新報』の創刊は明治十五（一八八二）年だが、この新聞に掲載された社説のなかで圧倒的に扱われる頻度の高いテーマが朝鮮問題であった。ロジックはこうである。

朝鮮が旧体制（アンシャンレージュム）に固執する

ならば、いずれ清国、次いでロシアの植民地となつて日本の自立を脅かす。朝鮮の文明開化は、朝鮮にとつてはもとよりだが、日本の自立にとつても必要不可欠な条件である。朝鮮は本来であれば「とくに亜細亜を興す」友邦であるべきだが、そのために欠かすことのできない文明開化に朝鮮はなぜめざめないのか。福澤のそうした焦燥が朝鮮の「頑迷固陋」に対する怒りであり、痛罵の口吻が時事新報には満ちている。

十九世紀末、四度にわたり朝鮮旅行を敢行した人類学者イザベラ・バードには『朝鮮紀行——英国婦

人の見た李朝末期』という著作がある。そのなかで彼女は次のように述べている。

「朝鮮国内は全土が官僚主義に色濃く染まっている。官僚主義の悪弊がおびただしくはびこっているばかりでなく、政府の機構全体が悪習そのもの、底もなければ汀もない腐敗の海、略奪の機関で、あらゆる勤勉の芽という芽をつぶしてしまう。職位や賞罰は商品同様に売買され、政府が急速に衰退しても、被支配層を食いものにする権利だけは存続するのである（講談社学術文庫）」

バードのいう朝鮮の往時の官僚主義とはどんなものだったか。朝鮮の高級官僚は両班といわれ、科擧というきわめつきの難関を突破した一握りの秀才たちである。両班は文班と武班よりなるが、文治主義の朝鮮においては圧倒的に文官優位である。儒学の知識に秀でた文官が官僚機構の中核に位置した。

国王を文治官僚が取り巻き、国王の意思を支え体する彼らの合議によって国家が統治されてき

た。道の長官に始まり、府、郡、県にいたるまでのすべてが中央から派遣された官僚によって支配され（郡県制）、そうすることによって地方での権力集団の形成を阻止した。多くの武人が多様な地方権力を形成した江戸時代日本の幕藩体制（封建制）とは、きわめて対照的であった。

郡県制が李朝五百年にわたり厳格に敷かれてきたのであれば、王朝体制はいかにも堅固なものだと思像されようが、内実はその逆であった。中央集権が極端に追求されたために、多様な社会集団や利益集団の形成が阻まれ、唯一残された集団である血族（宗族）に社会が分化されていった。血族あるいは門閥が両班の基本的な単位であり、血族を横断的に繋ぐ社会原理は不在であった。国王を取り巻く中央官僚が頂点に位置し、有力な血族が頂点をめざして競い合い、その競合の過程で起こる抗争は凄まじく、李朝史は血族抗争史として描くことさえ可能である。

アメリカ国務省のスタッフとして、長年のソウ

ル、釜山での勤務のあと、アカデミズムの世界において朝鮮政治分析に携わり、いまなおこの分野において第一級の著作とされる『朝鮮の政治社会—渦巻型構造の分析』を著したのが、グレゴリー・ヘンダーソンである。氏はこう記す。

「李朝の政府とは、人びとを急速にそのなかにまき込んでしまう巨大な渦巻きであって、瞬時にして彼らを野心の絶頂近くに押し上げることと思えば、次の瞬間には彼らを一掃し、しばしば仮借なく処刑したり追放したりするのであった。それは、田園ののんびりした四季のリズムとなんら関係のないものであった。……王朝は平静を装いながらも、興奮と論争に明け暮れたのであった(サイマル出版会)

抗争に明け暮れていたのは支配層のみであり、圧倒的多数の中人、常人、賤人は埒外であった。中間層が完全に欠落していたのである。再びヘンダーソンはいう。

「朝鮮社会は、基本的に、あらゆる権利を持つ支配層とあらゆる義務を背負わされた被支配層との

二極社会であった。独自の文化と商売という価値基準を持つ有力な中産階級という、西欧、および日本における概念は、朝鮮には無関係であった」

鎖国体制下の朝鮮に潜入し居住した唯一のヨーロッパ人集団が、パリ外邦伝教会のフランス人宣教師たちである。彼らからの通信を素材に書かれた著作、『朝鮮事情』のなかでシャルル・ダレは次のように述べている。

「貴族たちは、いくつかの派閥に分かれ、互いに執拗な憎悪をぶつけ合っている。しかし、彼らの党派は、なんら政治的、行政的原理を異にするものではなく、ただ尊厳とか、職務上の影響力のみを言い争っている大義名分だけのものである。朝鮮における最近三世紀の期間は、ただ貴族層の血まぐさい不毛の争いの単調な歴史にしか過ぎなかった。

……すべての貴族は、それらの一つに必ず属し、ただ高位高官を独占し敵対派の接近を排除することだけに腐心する。このことから、永続的な不和と争いが生じるようになった。これらの争いは、多く

の場合、敗北した党派の指導者の抹殺を期して終焉する〔平凡社東洋文庫〕

政治文化の伝統という拘束からみずからを解き放つというのは、そう簡単なことではない。一八四八年に独立した国家が大韓民国であるが、この国の政治家、官僚エリート、知識人層を含めた諸集団間の荒々しい権力抗争は、李朝時代のそれを彷彿させるようになお激しい。歴代大統領の末路は、日本などでは想像さえできないほどの悲惨さである。李承晩は失脚して亡命先のハワイで客死。朴正熙は側近により暗殺、全斗煥は反乱事件の首謀者として死刑判決、盧泰愚は懲役十七年、盧武鉉は投身自殺、李明博は懲役十七年、朴槿恵は弾劾を受けて大統領職を追われた。現在の大統領は尹錫悦だが、前任の文在寅との暗闘が始まっていると伝えられる。

韓国の左派政治家、官僚エリート、知識人層は、その観念において「新しき両班」なのに違いな

い。彼らはこう考える。新たな権力者となった李承晩や朴正熙は反共主義者として朝鮮分断の道を歩み、みずからを侵した日本、そしてアメリカと手を組んで大韓民国を作ってしまった。これは道義において許し難い、というのである。

彼らが反日の旗を降ろすことはみずからの正統性を棄却するに等しいのである。左派エリートたちは、韓国は「間違つて作られた国」だと考えていると李榮薫は『反日種族主義——日韓危機の根源』のなかで指摘している。そうに違いない。「過去史清算」とか「積弊清算」とかいう物言いは、そういう彼らのセンチメントを政治用語化したものなのであろう。この永遠の敵対感情に日本はこれまでも散々苦しめられてきたが、その終わりはまだ見通せない。

#### わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長を歴任。八五年、「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、開発経済学で大正芳記記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代でアジア 太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇一二年、正論大賞。